

巻頭言

医学教育における生理学のidentity

福岡大学医学部生理学

今 永 一 成

教養部廃止に伴い、医学部では解剖学、生理学、医化学などの基礎専門科目が入学してまもない2年目から始まることが多くなった。多くの学生は生理学は苦手な科目と云う。教科書に書いてあるような図を沢山プリントで配りこれらを単に説明しようとする講義は論外として、大方の生理学担当教師は、生理学の本質である「ものの考え方」「論理的思考」をモットーに講義をしていると思う。学生が苦手とする理由の一つには、それまでの記憶にたよった学習方法であるがために、「考える力」「考える意欲」を失っているというか、そのように育まれてないためではなかろうか。これには教師の責任でもあるが、学生を単純に学力で評価しようとする知識獲得型教育が根底にあったことは否めない。医学情報が急増してきた現在、単なる知識獲得型学習では対応不可能であり、「問題提起」「問題解決」能力が求められ、教育改革の一つとしてチュートリアル方式教育や少人数グループ学習が導入されることとなったと思われる。この学習方法の所期の目的は、教師と学生との「人間関係」「信頼関係」という教育の原点に立ち返って達成されることは論を待たない。ところで、4年毎に実施される全国医学部学生実体調査によれば、人生問題、学業問題の相談相手に教師を選択する率は常に最低であり極めて低い。教師はいろいろ手を尽くし学生との接触を試みているようであるが、学生の「教師離れ」は著しい。このような学生気質の中であって、「信頼される

人間性」「指導力」など教師の教師たる真髄が問われることになろう。「好奇心をもたせること」「論理的思考を通して考える楽しさを感じさせ、創造力を養う」（これが生理学の本来の役割であるが）「学生の良いところ（長所）を引き出すこと」が求められる。生理学の役割は大きい。

このところ、コアカリキュラムなるものが出され、それに沿った教育が要求されている。医師養成の場であるので臨床指向となるのは当然であるが、生理学を含め基礎医学教育があまりにも「出前」的存在になってしまっている感がある。各項目の中の基礎的要項は正に「病態生理」である。チュートリアルにしても、低学年で取り上げられる課題は大方「病態生理」である。大学の方針ではあろうが生理学担当教授に臨床領域の方が就任することさえある。医学教育において「病態生理学」の重要性が高まってきたためであろう。「病態生理学」は「生理学的基盤の上に立って病態を解明する」学問体系であるからには、そこには生理学の本質が流れていなくてはならない。このような状況の中で、「生理学のidentity」を如何に、どこに置くか、如何に主張するかを真剣に考えねばならないであろう。

教育改革におけるもう一つの課題は「評価」のことであろう。日本人はもともと個人的責任感が強く、それがために「他人を評価しない」「他人から評価されたくない」と云う感情を持っている。「評価」に慣れていない。しかし、社会の変化に

に伴い、責任の所在が求められるようになると、「自己評価」に加え「外部評価」は避けて通れなくなる。「学生による教師の評価」その内容が正当性をもっているかどうかは別にして、すでに何らかの形で実施されている。「教師による学生の評価」は今後の教育、学習のやり方により新しい発想のもとに行われることになろうが、生理学の担当者は生理学講義では勿論のこと、チュートリアルにおいても「生理学のidentity」をもって評価すべきであろう。難しいのは「教師による教師の評価」（研究に対する「研究者間の評価」もその範疇に入る）であろう。「評価」は評価する者の個人的価値観に左右されがちであるので、正当な客観的評価の確立が当然求められる。誰が、何を、

どのように評価するのか、その評価の意味付け、評価から得られるものなど未だ釈然としない。「評価のあり方」を評価することも必要であろう。今後、教育（研究）においてその活性化のために改革が盛んになることと思われるが、その進展には「評価」はつきものであり、「正当な評価を行うこと」「その評価を受け入れ、さらなる発展のための糧とする」ことの意識改革が必要になろう。

将来の研究者、医師を育てる現場において、特に「論理的思考」「創造力」を育む上で重要な位置を占める生理学を担当する教師が、「生理学のidentity」を今こそしっかり認識することが期待される。